

## 沙石集『歌ゆゑに命を失ふ事』定期テスト対策問題 | 現代語訳・文法・内容の頻出設問と解答 解答・解説

---

問1 どうしてこれほどの歌を詠むことができようか、いや、とても詠めまい（と兼盛が心中で思った）。／「いかで〜べき」＝反語。相手の歌のすばらしさへの驚嘆。

問2 恋をしているという私の噂が、早くも立ってしまったことだ。誰にも知られないように、心ひそかに思いはじめたばかりなのに。／「立ちにけり」＝完了「ぬ」連用形＋詠嘆の「けり」。

問3 包み隠していたけれども、顔色に出してしまっていたのだなあ、私の恋は。「もの思いをしているのですか」と人が尋ねるほどまでに。／「色」＝表情・顔色。

問4 回復の見込みがないということ（むね）。／「頼み」＝あてにすること、「由」＝〜という旨。

問5 執着心はつまらない（よくない）ことであるけれども、（一つの）道を深く思いつめる習い（ありよう）は、しみじみと心を打つことであるよ。／仏教者である編者の評。

問6 早くも。まだその時期でもないのに。

問7（歌合の場で）歌に節をつけて声に出して読み上げること（披講）。

問8 帝のご意向・お気持ち。／天皇の機嫌・意向を表す語で、空模様の意ではない。「天気を伺ふ」＝帝のご意向をうかがう。超頻出。

問9 つらく情けなく。

問10（落胆のあまり）食事がのどを通らなくなる病。

問11 見舞う。／「訪ふ」系の語。弔うの意もあるが、ここは病人の見舞い。

問12 「受く」の謙讓語（いただく）。題をお与えになった帝への敬意。

問13 係助詞「ぞ」（強意）を受けて、過去の助動詞「けり」が**連体形**「ける」で結ばれた係り結び。

問14 「と言ふ」がつづまった語（といふ→てふ）。「〜という」の意。

問15 過去の助動詞「き」の**已然形**。係助詞「こそ」を受けた係り結び。／「人に知られずひそかに思いはじめたのに」という余情を残す。

問16 みまかり（う四「みまかる」連用形。「死ぬ」の婉曲・謙讓的な言い方）＋に（完了の助動詞「ぬ」連用形）＋けり（過去の助動詞「けり」終止形）。「とうとう亡くなってしまった」。

問17 「あれ」（あはれにこそあれ）。係り結びの**結びの省略**（結びの流れではなく省略）。余情を残す表現。

問18 断定の助動詞「なり」連用形「に」＋疑問の係助詞「や」。下に「あらむ」が省略されている。「入っているのではないだろうか」。／「侍る」は丁寧語（読者への敬意）。

問19 忠見の歌も兼盛の歌も、どちらも甲乙つけがたい名歌だったから。

**問20** 帝が忠見の歌は二、三度しか口ずさまなかったのに対し、兼盛の歌は何度も繰り返し口ずさんだこと。帝のお気持ちが兼盛の歌に傾いていることを示すための描写。

**問21** 帝のご意向が左方（＝本文では兼盛の方）にある、ということ。判者たちはこれを根拠に兼盛の勝ちと判定した。／※史実の天徳内裏歌合では兼盛は右方とされるが、本文の記述に即して答える。

**問22** 自分こそ名歌を詠んだと思っていたのに、兼盛の歌の結句「ものや思ふと人の問ふまで」を聞いた瞬間、その出来栄えに「ああ、やられた（負けた）」と直感し、衝撃を受けた。

**問23** 歌合で名歌を詠みながら敗れた衝撃で心がふさがり、食事ものどを通らない病となって、ついに死んでしまった。まさに「歌のせいで命を失った」話である。

**問24** 村上天皇（天徳四年〔960年〕の内裏歌合）。歌合とは、歌人が左方・右方に分かれて題に沿った歌を出し合い、判者が優劣を判定する催し。

**問25** (1)鎌倉時代（後期）成立の仏教説話集。編者は無住（無住一円）。(2)「忍ぶれど」。／兼盛「忍ぶれど」（四〇番）・忠見「恋すてふ」（四一番）は百人一首に並んで収められている。

**問26** 「音」「打ち」「川」。／いずれも鼓から連想される語（鼓は音に聞き、打って鳴らし、革を張るもの）。意識的に連想語をちりばめる技法が縁語。

**問27** 鼓は「打つ」ものなので、「打ち見れば」とすることで「鼓」の縁語が歌に加わり、歌全体が鼓の縁でまともって、趣深くなった。

**問28** 鼓に張る「革（かは）」。「川辺」の「かは」に鼓の「革」が掛けられ（掛詞）、これも「鼓」の縁語としてはたらく。